

論 文

「此の身は飛蓬に類し、此の心は淡きこと水の如し」

—— 靑山衣洲の清国体験をめぐって*

許 時 嘉

1 はじめに

本稿は明治後期に台湾と清国で活躍していた日本漢詩人・記者・翻訳家である靑山衣洲（1855-1919）の清国滞在体験を対象に、明治期海外進出の流れにおける彼の文筆活動の実態と詩文意識の特徴を究明する。

1880年代から、日本帝国主義のアジア進出に伴う海外雄飛思想の影響下で、漢詩文素養という前近代の知を基盤とする知識人たちはアジア進出の一翼を担い、海を渡って漢詩文共同体を形成した。志賀重昂『南洋時事』『大役小志』に散見する漢詩をはじめ、日清・日露戦争期の戦争関連詩集、日中・日台の詩文活動などは海外膨張とともに新たに誕生したものである。その中には、志の発露として漢詩を詠じた例があり、海外征服の利器として漢詩文の再興を目指そうとする創作活動もあった¹。齋藤希史は漢詩本来の二重のエトス構造が近代日本の「文学」概念の再編に影響を与えたと指摘している²。それは「仕=政治=士人的エトス」と「隠=文学=文人的エトス」とが並立し、かつ対立してもいるという構造である。では、この漢詩文のエトス構造の二重性と明治期の政治的な海外進出とはどのような連関を帯びているのか。海外進出に伴う漢詩文活動において、政経イデオロギーでは解釈し尽くせない花鳥風月的な側面、言い換えれば、詩文著述と琴碁書画の世界に生まれた、出仕や政治とは無縁な文人趣味とその審美性はどのように現われているのか。

それに対して、筆者はかつて靑山衣洲の滞台期間中の詩文に反映された思想の分析を試みて、児玉源太郎の知遇を得て台湾で活躍できた時も冷遇されるに至ってからも、靑山の詩文がなす意識は、植民地統治初期の帝国「協力」者としての行動に親和性を示す「士人としての自己実現」である一方で、時には政治的現実とは無縁の、「詩人としての自己実現」につながる部分もある

*本稿は日本台湾学会第17回学術大会（2015年5月23日於東北大学）で口頭発表した原稿に基づき、大幅に加筆したものである。

1 許時嘉『明治日本の文明言説とその変容』（日本経済評論社、2014年）の第七章「近代文化の形成における「伝統的」文体の変容」を参照。

2 齋藤希史『漢文脈と近代日本——もう一つのことばの世界』（日本放送出版協会、2007年）、125-131頁。

ことが分かった³。この詩人的性格のために、衣洲が自分の「無用な漢詩文」を自嘲して「戯れ」の修辞表現を極めようとするほど、既成政権への無批判、政治協力への無頓着がさらに顕著になってくるのである⁴。

本稿は上記の問題意識と知見に基づき、さらに初山衣洲の離台後から清国渡航期間中の日記と詩文作品（大阪府立中之島図書館収蔵）を研究対象にし、これまで学界で注目されていない清国滞在体験の特徴を考察する。『台湾日日新報』漢文部主任に勤めていた初山衣洲は1904年帰国後、日本の膨張政策と軌を一にするかのように、1905年に清国に渡り、1906年に保定陸軍軍官学堂に赴任した。以下では初山の離台後の日記と詩文作品を分析しながら、明治後期の海外進出における一漢詩人の心境について検討する。

2 日記に見る離台後の初山衣洲

台湾滞在時代（1898年～1904年）の初山衣洲（以下、衣洲と略す）についてはある程度研究されているが⁵、1904年離台後の足跡はまだ知られていない。まず大阪府立中之島図書館収蔵の初山衣洲肉筆の日記：①澄心廬日記（1904年4月23日～12月30日）、②落木菴日記（1905年1月1日～8月31日）、③北游日記（1906年1月1日～11月25日）、④氷壺軒日記（1907年1月1日～12月31日）に基づいて1904年4月台湾を離れた後の衣洲について概略を紹介しよう。

衣洲は1904年4月10日に友人に見送られて台湾の基隆から乗船し、東京に戻った。4月23日から和歌山県・箕島にある喜多貞吉の宅に客居し、台湾の友人たちとの通信を続けている。6月頃、児玉源太郎は黄葉秋造、中村桜溪を經由して衣洲の近状を知り、失意なら近くに呼び寄せようという意を示したが、日露戦争勃発後、児玉の満州出征の際に、その妾の朝田時子を通して総督随行を望んだにもかかわらず、衣洲の希望は何故か叶わなかった⁶。その後、渡清の話は9月に一時的に復活したように見え、易に精通する衣洲はこれまでにない頻度で繰り返し前途について占い⁷、牛荘に行くことにした⁸。妻のたまを故郷に帰らせ、一人で小田原に移転し、東京に頻繁に足を運んだ。しかし、牛荘の黒澤禮吉とのやり取りの中で渡清の企図は日記からまた消えた。その

3 初山衣洲の漢詩文の無用論に関する分析は、許時嘉「漢詩人の越境と帝国への「協力」—— 初山衣洲の台湾体験を例として」（杉原達編『戦後日本の〈帝国〉体験—— 断裂し重なり合う歴史と対峙する』、青弓社、2018年、69-93頁）を参照。

4 「漢詩人の越境と帝国への「協力」—— 初山衣洲の台湾体験を例として」、89頁。

5 台湾滞在時代の初山衣洲について、日本側に島田謹二、齋藤希史、橋本恭子、台湾側に廖振富、黄美娥、白佳琳、蕭惠文、薛建蓉、許時嘉による研究がある。先行研究の検討は許時嘉「〈初山衣洲日記〉初探：日治初期在臺日人社会與日臺交流（1898-1904）」（『臺灣史研究』20-4、中央研究院臺灣史研究所、2013年12月、179-204頁）を参照。また、初山衣洲研究の一次資料について、『在臺日人漢詩文集』（廖振富・張明権（選注）、臺灣文学館、2013年）及び『初山衣洲在臺日記1898-1904』（許時嘉・朴澤好美編訳、中央研究院臺灣史研究所、2016年）を参照。

6 『澄心廬日記』、1904年7月1日。くずし字の翻刻にあたって、元・半田市立博物館学芸員朴澤好美氏の多大なる協力を得ている。この場を借りて御礼を申し上げたい。

7 『澄心廬日記』1904年の9月1日、9月7日、9月9日、9月10日、9月12日、9月15日、9月17日、9月24日、9月26日、10月8日、10月11日、11月17日、11月20日、11月26日、12月1日、12月6日

8 『澄心廬日記』、1904年9月12日。

後、東華倶楽部と東斌学堂の設立に携わった。1904年11月23日以降、友人の林古松より東斌学堂の話聞いた。彼は旧友の盧子銘を介して東斌学校と清国公使館との条約を締結し⁹、翌年1月に学堂趣意書を執筆し¹⁰、学堂校主を依頼する世話役として忙殺された¹¹。同時期に旧友の永井禾原から、加藤高明の東京日日新聞へ入社を勧められ、「今年こそは如何志を達するの端緒を得んか」と日記に記し、前途が一時的に明るく見えていた¹²。

衣洲は東斌学堂の設立に関して清国公使館と陸軍省との交渉役を担当し、1905年2月13日に東京の東斌学堂に正式に移転した。東斌学堂は寺尾亨の手によって軍人志望の清国留学生の準備教育を目的として設立されたもので、校舎は芝公園内にあってもっぱら武の教育を施した¹³。それまでは1903年成立の東京振武学校が軍人養成学校として清国留学生の受け皿となっており、唐継堯、閻錫山、李烈鈞などの卒業生を出していた¹⁴。しかし、留学者数が年々増加し、清国公使館にとって新しい受け入れ先が必要となっていたので、東斌学堂の設立には好機であった。1905年3月12日、清国公使楊枢が学堂を視察し、翌月7日、衣洲は日記に「公使館と参謀本部の間に交渉あり為に東奔西走す」と記している。のちに清国公使館は東斌学堂兵学科の入学者が振武学校と同様の条件で、「一年六か月を以て卒業させ、その後は直ちに聯隊に送入り、順次士官学校に入学」させることについて外務省を経由して陸軍省に照会することになった¹⁵。留学生受け入れ関係の打診において衣洲の活躍があったと推測できる。

東斌学堂は5月5日に開校。校務に携わるほか、衣洲は同時期に「如雲綿」の事業を起こしたが、その内容と関与の程度については明らかになっていない。ところが、校務と事業は共にうまく行かず、衣洲を悩ませたようで、日記に「心裡焼乱」¹⁶と書いている。この頃の記述は散漫で、定期的に記録されていないので、衣洲の心労が窺える。8月24日に林古松から「(寺尾亨が)東斌に資金を投ずるに付ては一切の旧関係者を放逐」する旨を知り、「呆然、為す所を知らず」という心境を綴った。29日、寺尾亨が学校引継ぎの事について協議しに来て、「是日始めて予にも引退せん旨」を言い渡した。日記は8月末を以て終止符を打ち、年末までの内容が見当たらない。

次の日記は1906年元旦からである。衣洲はもう天津にいた。1905年7月頃、校務に悩み続けた末、また児玉に手紙を出して満州に赴くことを願った¹⁷。さらに、1905年8月26日日記に、林古松と北京渡航について談合したとの記録があるが、同年年末までの日記が残されていないので、その後北京ではなく、天津に職を得た経緯が不明である。天津で仕事を開始して間もなく、1906年3

9 『澄心廬日記』、1904年12月19日。

10 『落木菴日記』、1905年1月9日。

11 『落木菴日記』、1905年1月24日、30日。

12 『落木菴日記』、1905年1月1日。

13 松本亀次郎「中華留學生教育小史」、『中華五十日遊記』(東亜書房、1931年)、16頁。

14 「中華留學生教育小史」、14頁。

15 「明治38年/3)東斌学堂設立ニ関シ清国公使ヨリ照会ノ件 三月」、JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12081872700、学校関係雑件 第三卷 (B3-10-2-1-003) (外務省外交史料館)。

16 『落木菴日記』、1905年5月28日～6月10日。

17 『落木菴日記』、1905年7月6日、7月10日。

月30日、坂西利八郎と寺西秀武の推薦により、新設の陸軍大学堂の翻訳官を引き受け、4月7日天津から保定に赴任した。日記に次の内容を記している。

三十日……速水氏社に來り保定によき口あり坂西氏に逢ふて面議すべき旨を告る。

三十一日、甲戌晴塵立つ。早起。坂西少佐を訪ひ、保定の件を談ず。保定にて陸軍大學堂創立に付寺西秀武より翻譯によきもの一名入用との事にて予を推薦せらるといふ。依て此聘に應ずる事に決す。薪水百兩なり。午後速水氏を領事館に訪ひ、保定行決定の旨を告ぐ。¹⁸

保定陸軍軍官学堂は当時直隸總督・北洋大臣である袁世凱が日本の軍事教育に倣って設立した軍事教育学校である¹⁹。日本人顧問坂西利八郎の主導により、北洋軍当時歩兵少佐の寺西秀武が総教習を担当し、大量の日本人軍人を教員として起用した。坂西利八郎を始めとするこの日本人軍事顧問団の活動により、教育・訓練・演習など広い範囲に亘って北洋陸軍の土台が築かれたといわれている²⁰。当時は、中村正一（工兵大尉）、間村直義（砲兵大尉）、桜井文雄（歩兵大尉）、守永弥惣次（歩兵大尉）、納富四郎（陸軍特務曹長）、多熹多大治郎（砲兵大尉）、植崎一郎（騎兵軍曹）、井山謙吉（工兵大尉）、渡辺辰（工兵大尉）、宮内英熊（騎兵大尉）、雨森良意（三等軍医）が軍事教育に携わっていた²¹。教科書や訓練方法などは日本に学ぼうとしていたので、漢文に優れた日本人翻訳官を多く起用しなければならない。そのような状況にあつて、漢詩文能力の評価が高く、台湾時代から翻訳の仕事を多く経験し、かつて東斌学堂で中国人留学生教育に携わった経験を持つ靑島衣洲は相応しい人選であつた。衣洲のほかにも、中島比多吉、田風正樹、西田竜太、平山武清、山根虎次郎も翻訳・通訳として採用された。

1910年10月19日の辞任まで保定に滞在した衣洲は、「任衣洲」の名で多くの日本語の軍事教科書を漢文に翻訳していた（文末資料参照）²²。公務の傍ら、漢詩文創作も絶えることなく、保定滞在中の中国見聞を「水壺軒筆記」と題して日本人同郷会の機関誌『保定倶楽誌』に寄稿し²³、また1909年には漢詩集『燕雲集』を上梓している。台湾滞在中には金銭問題を抱え、日本に戻った直後は、将来に不安の気持ちを隠さなかつたのに対し、1906年1月から1907年にかけての天津・保定滞在中の記述は日常茶飯事を中心に淡々としている。時に腸炎の持病に煩わされているが、翻訳官平山武清の人事案において衣洲が主導権を持ったことや²⁴、学堂の権力者・寺西

18 『北游日記』（大阪府立中之島図書館収蔵）、1906年3月30日、3月31日。

19 保定陸軍軍官学校について張力云「從北洋武備學堂到保定陸軍軍官學校」（河北省政協文史資料研究委員會保定市政協文史資料研究委員會編『保定陸軍軍官學校』、人民出版社、1987年）参照。

20 楊典鏡『近代中国における日本人軍事顧問・教官並びに特務機関の研究（1898～1945）』（東京大学大学院人文社会系研究科博士論文、2008年）を参照。

21 李宗一『袁世凱傳』（中華書局、1980年）、114頁。

22 辞任の時間について当時の保定日本人会に記録が残っている。「会報 明治四十三年自八月至十一月保定日本人会記事」、『保定倶楽誌』32号、1910年12月。

23 『保定倶楽誌』（国会図書館収蔵、1910～1917年）が現在1910年分しか見つからない。

24 『北游日記』、1906年8月12日、8月13日、8月19日、8月30日、9月8日、9月10日、9月12日。

秀武に政論文章の翻訳を頼まれ、家族ぐるみの付き合いをしてきたことなどから伺えるように²⁵、天津・保定初期の日記の文字も比較的穏やかに見える。職場がある程度安定しているのかのように、骨董を収集し、花草の趣を嗜む余裕もあった。

3 詩人としての自意識——『燕雲集』（1909年）を中心に

一方、長い海外生活について衣洲はどのような思いを抱えていたのか。日記に見えない感情と心境が彼の詩集『燕雲集』から窺える。

『燕雲集』に収録されているのは、1906年から1909年にかけて天津、保定で書かれた作品である。生計のために、異郷の地に転々し奔走し続ける運命を振り返る内容が多い。例えば「天津客中次山左汪東渠見贈原韻」には、「北來幽燕年又改、困苦塩車鬢作翁（北のかた幽燕に來たりて年又た改まる、塩車に困苦して鬢は翁と作る）」²⁶とある。好きな仕事ではないにもかかわらず、生計を立てるために異郷の職に就かざるを得ず、無駄に年を食ってしまう、という悲嘆が窺える。中の「塩車」は『戦国策』の「驥服塩車（驥、塩車に服す）」の典故を想起させ、優れた才能を持つ者が低い地位に置かれてつまらない仕事をさせられるという譬えである。

また、「歳晚感懷」には「飛騰驚暮景、旅食鬢毛殘。七閱南荒暑、三逢北地寒。都非百年計、僅得一枝安。經盡崎嶇後、始知行路難（飛騰して暮景に驚き、旅食して鬢毛残す。七たび南荒の暑、三たび逢う北地の寒。都て百年の計に非ずして、僅かに得たり一枝の安。經尽くす崎嶇の後、始めて知る行路の難きを）」²⁷とある。1908年末の作である。1898年台湾に渡ってから異郷に流転して10年もの歳月が経ったが、いずれも一時の安らぎに過ぎず、百年の計とはいえない。「行路難し」の結びから長い旅食に苦しむ彼の様子が窺えるだろう。

不遇な生涯を語る一方、詩人と自負する意識もしばしば現れている。「津沽雜詩 原十首録四」の「未脱狐裘不是春、狂飈捲雪潞河濱。相逢欲問有詩否、風雪橋邊策蹇人（未だ狐裘を脱せず是れ春ならず。狂飈雪を捲く潞河の浜。相い逢うもの問わんと欲す詩ありや否やと、風雪橋邊策蹇の人に）」²⁸は、北地の厳しい冬の中に詩人たちが詩句を苦吟し続ける姿を浮き彫りにする。「策蹇人」を未刊行の手稿に照らし合わせると、初稿では「驢背人」と書かれていたことが分かる²⁹。典故は「灞橋驢上（詩思は灞橋風雪中、驢子の上に在り）」で、唐代の相国鄭綰が友人に新しい詩作について聞かれた時の回答である。鄭は、「詩の構想を練ることができるのは灞橋風雪中、驢子の背上にあるときである」といい、今のように俗事にかかわっているうちはよい詩はできな

25 『北游日記』、1906年9月20日、10月22日。

26 『燕雲集』（雷啓中、1909年）、5葉。

27 『燕雲集』、18葉。

28 『燕雲集』、6葉。

29 『[初山衣洲遺書] [49] 航北詩草』（大阪府立中之島図書館収蔵）。衣洲は執筆に際して燕雲集の題名を何度も変えた。手稿の自己添削からみると、次の流れを推測できる。最初は中国に渡る途中の詩作も入れて「航北詩草」としていたが、中国現地での詩作に限定することにした後で、「游燕詩草」と変更し、最後に「燕雲集」に定めた。

いと自嘲している。本来、「灞橋風雪」は唐代詩人王維が驢馬に乗って苦吟する友人孟浩然の姿をモチーフにして作られた作品だが、鄭縈はこれを用いて詩興をもつ詩人が身をおくべき理想的創作環境を呈示した。それ以来、詩人が大雪の中で詩句を練るのは詩趣に富む行為と見なされ、中国絵画に有名な画題にもなった。衣洲は詩人としての自分を常に確かめようとするかのように、天津の風雪を背景にして詩興をそそられる自分自身の姿を詩句に当てはめようとしている³⁰。

このような作詩の場面をモチーフとする詩句は少なくない。「新春漫興」には、「半空紅似暮雲燒、戸戸龍燈五色綃。獨有詩人狂傲世、苦吟擁被過元宵（半空^{くれな}紅にして暮雲の焼くるに似たり、戸戸の龍燈 五色の綃あり。独り世に狂傲するもの詩人有り、苦吟 被を擁いて元宵を過ごす）」³¹という句が見いだせる。前半は旧正月期間中に街の至る所が赤く飾り付けされ、元宵節に提灯に明かりを点す風景を描いている。後半には、多彩な提灯を灯し、お祝いの雰囲気盛り上がる中、独り孤高を保って世に流されず、布団の中で詩句を求めて静かに元宵節を過ごした詩人の姿が浮かび上がる。一方、この詩を書いている衣洲は現実には一体何をしていたのか。1907年2月27日の日記には、「晴。風沙満空。今日上元に当るを以て放学。湯目北水、范寛の画幅を携へ来る」³²。賑やかな街を離れて友人と范寛の絵画を楽しむ様子が窺える。それにもかかわらず、衣洲は詩文を綴る場面においては、伝統的漢「詩人」のトポスを積極的に生かそうとしている。俗世に関心を持たない詩人に相応しい立場を強調することで、俗世の風俗慣習に捉われない祝日の過ごし方、周りの目を気にせず、世俗に流されない孤高の詩人の価値観、の正当性を裏付けようとしている。

また、「東関夜帰」には「寒食東風柳未黄、帝畿春色尚荒涼。将傾缺月西山上、坐使詩人索句忙（寒食の東風 柳未だ黄ならず。帝畿の春色 尚お荒涼なり。将に缺けたる月の傾かんとす西山の上、坐^{そぞろ}に詩人をして句を索^{いそがわ}すること忙しくす）」³³とある。寒食節の春風が吹いているが、京城近郊では春はまだ浅い、それにもかかわらず、日が暮れて下弦の月が出る頃の景色は春景以上魅力に富み、詩人の詩心を動かす、という。一句目の「寒食東風柳未黄」は中唐・韓翃の「春城無処不飛花、寒食東風御柳斜（春城、處として花を飛ばさざるはなく、寒食、東風、御柳斜めなり）」をパロディーするかのようになり、春の気配が薄く、予想に反する寂しい大地の景色が浮かび上がってくる。そして「柳未黄」（時期に合わない様子）と「荒涼」（恵まれない境遇）、「缺月」（欠けていく月）が創り上げる寥々たる風景は詩人の共感を誘い、詩情を触発したように見える。しかし、この詩句が示す、寂寥たる景色を眺めて感動する詩人、という構図は、あくまで人為的なものである。詩人の自意識が働いた結果として、これらの景色が成立するのである。どのような風景であっても、詩人はそれなりの感受性と詩興をそそられ、詩を綴ることができるからであ

30 「驢背人」をモチーフにした詩句はいくつもある。例として「客中立秋」（12葉）「秋懷四首」（13葉）「幼軒和至。疊韻卻贈此日微雪」（18葉）が挙げられる。

31 『燕雲集』、11葉。

32 『冰壺軒日記』、1907年2月27日。

33 『燕雲集』、11葉。

る。衣洲が編集に当たって、この詩句の上に友人が書いた「詩癖ある者は必ず仙心を有す」という評を残しているのは同様の理由によるのだろう。

詩人の自意識に駆り立てられて、作品は常に詩文著述の志が報われるか否かをめぐる喜びや焦燥感に伴われている。『燕雲集』最後の3番目の詩に「采風訪俗心還苦、身後誰刊一卷詩（風を采り俗を訪うも心は還た苦しむ、身後誰か一卷の詩を刊せんや）」³⁴と記し、以前台湾で書いた『台湾風俗詩』の上梓が実現できない苦悶を表している。一方、異郷で詩文の友を得ることは、詩文への渴望が報われる喜びとなり、長きにわたる離郷の不満を少しは慰める。「異域幸逢同調士、学他韓孟日賡酬（異域 幸いに逢う同調の士、他の韓孟に学いて日々賡酬す）」³⁵のように、異郷で言語相通の友人に巡り合い、終生親交を結んだ韓愈・孟郊に倣って、詩歌をよみかわし、切磋琢磨しようとする。また、「忽得知己從異土、汶陽汪君交誼古。贈我新篇愜以慷、挽瀾直欲繼韓杜（忽ちに得る知己は異土従りす、汶陽の汪君 誼みを交うること古し。我に贈る新編 慨して以て慷、瀾を挽きて直ちに韓杜を継がんと欲す）」³⁶の如く、異土に得た知己と詩文を交わし、韓愈、杜甫という文章の大家に迫るのもまだ遅くないという楽観的な口調を示しもある。清国の友人たちを宴席に招いて詩文を応酬する際に、衣洲は「春風満座同心在、暫忘身生似断蓬（春風座に満つるは同心在ればなり、暫く忘る身生の断蓬に似たるを）」³⁷と詠っており、友人と詩文を応酬する喜びが根無しのような行方定めぬ旅人に多少の慰めをもたらしたことが窺える。

衣洲の中国滞在時の作品には、現実世界の不遇と衣食のための職への不満でどうしようもない気持ちもあれば、世俗にとらわれたくないという心情もある。異郷で詩文を通して自己実現できる達成感もあれば、忘却された台湾風俗詩のように誰も重視してくれないことへの現実的な理解もある。これらの様々な心境は矛盾し合いつつ、共存している。1907年、親友の西村天囚が北京を訪れ、衣洲を北京に誘ったが、職場にとらわれて離れられない自分の境遇について「久倚人籬下、物累四縈繞。我心已飛越、我驅難自專（久しく倚る人籬の下、物の累い四もに縈繞す。我が心は已に飛越して、我が軀自ら専らにし難し）」³⁸と述べている。我が心はすでに飛び越えているが、我が身は自分の意思で決められるものではない、という。また、「此身類飛蓬、此心淡如水（此の身は飛蓬に類し、此の心は淡きこと水の如し）」³⁹のごとく、我が身は根無しで行方がわからないものの、我が心は清い水のように物事にとらわれずに淡々としている。あるいは「身跡難挺塵網外、詩思常在白雲中（身跡 塵網の外に挺し難し、詩想 常に白雲の中に在り）」⁴⁰のように、現実を諦め、詩文の世界に没頭しようとする。このような身体と心の相違の表現が『燕雲

34 「偶檢篋中。獲台湾風俗詩手稿一本。追想往事、走筆書一絶於卷尾」、『燕雲集』、20-21葉。

35 「初冬述懷寄金子乾」、『燕雲集』、17葉。

36 「天津客中次山左汪東渠見贈原韻」、『燕雲集』、5葉。

37 「一月初五冰壺軒朝同廖少游雷素安曹憶堂李靈贊諸君酒間率賦」、『燕雲集』、11葉。

38 「西村天囚抵燕京寄書促游 詩以答之」、『燕雲集』、12葉。

39 「言懷」、『燕雲集』、21葉。

40 「天津客中次山左汪東渠見贈原韻」、『燕雲集』、5葉。

集』に頻繁に表れている⁴¹。

4 詩人の目に映る故郷の風景——「雙鑑浦 観日出歌」(1909年)をめぐって

『燕雲集』刊行後、衣洲は一時帰国した。1909年7月12日に天津を発し、船で大阪に着き、京都、奈良、三重を歴遊し、故郷愛知尾張に戻った。同時期の日記が見当たらないので、帰国中の行動は詩集「帰展詩草」(未刊行、大阪中之島図書館収蔵)にのみ窺える。滞在期間は不明だが、「帰展詩草」において8月16日に上谷を訪れたとあるから、一か月以上の長い休暇と推測できる。「帰展詩草」は全13首、旧友と再会した喜びや懐かしい郷土風景への愛着を描きながら、人事変遷の感慨と紆余曲折の生涯に慨嘆する内容を盛り込んでいる⁴²。

三年間の海外生活を経て再び故郷の景色を目にした衣洲はそれをどのように描いているのか。衣洲は大阪で西村天囚、大江敬香らの親友と旧交を温めた後、7月25日に汽車で東の故郷へと赴き、夕方に三重県伊勢市二見浦の旅館に宿泊した。翌日旅館で日の出の壮観を見て感極まり、「雙鑑浦 観日出歌」と題して詩を詠んだ。伊勢志摩海岸の二見浦は古来日の出の名所で、夫婦巖と呼ばれる立石と利尻石の間から日が昇る光景は江戸時代からしばしば浮世絵の主題となっている⁴³。夏至の頃の天気が良い日には夫婦巖の間に富士の姿が見え、双岩の間に浮かんだ富士山の後ろから日光がさしている景色は定評があった。

ところが、「雙鑑浦 観日出歌」という衣洲の詩の題名は、実は江戸時代に頼山陽が二見浦を訪れた時に創作した詩題に拠っている。雙鑑浦は二見浦の別称である。1829年3月29日、50歳の頼山陽は母に侍して伊勢神宮に詣でた後、舟で二見浦に至り、旅館に泊まった。日の出を楽しんだ彼は「雙鑑浦 観日出歌」と題して次の詩を詠んだ。

金鳥新浴大東洋、帯_レ濕朱輪未_レ吐_レ芒。參山遠山猶宿霧、海濤漸作_レ赤金光_レ。三萬六千中一日、来_レ此始見_レ全日出_レ。瞬息飛升難_レ正視_レ、乃信催_レ吾白_レ鬢髮_レ。今日春盡欲_レ呼_レ觥、傳_レ語義和且徐行⁴⁴。

日が水面に表れ、朦朧とした水蒸気に包まれてしまう。前景の岩と遠景の山がぼんやりとしていり、日は空の中央に一気に昇り、赤熱な光が波浪を照らし輝いている。日の出の壮大な光景を描写する頼山陽の詩は、のちに現地の日の神信仰に利用された⁴⁵。

41 この身体と心の対立表現は、台湾時代の作品群にあまり見かけない。

42 「帰展詩草」にはかつて雑誌で発表されたものがある。例えば、後述の「雙鑑浦 観日出歌」は中国保定の日本人会同人誌である『保定倶楽誌』第26号(1910年1月1日、10頁)に掲載されている。

43 歌川国貞と歌川広重とも二見浦の夫婦岩を作品としている。

44 「頼山陽詩集 卷二十〔文政十二年〕」、『頼山陽全書 詩集』(頼山陽先生遺蹟顕彰会、1932年)、656-657頁。

45 現地の二見興玉神社は1910年に猿田彦大神を祀る興玉社と宇迦御魂大神を祀る三宮神社を合祀したもので、その際に現社名となった。ネット上で公開した私家蔵の昭和14年刊行の『二見興玉神社参拝のしをり』に「御日の

一方、「御日の神の拝所」の二見浦の景色が衣洲の筆では次のように展開されている。

曉霧捲散千里風、雙岩屹立驚濤中。一岩較大一岩小、莫是雄龍與雌龍。群客爭先倚爽塏、須臾紅日上東海。雙龍爭珠勢飛騰、波浪碎發黃金彩。僮夫跪拜書生嗤、此中是非都不知。無端詩思從天落、我與鷗侶俱忘機⁴⁶。

(曉霧 巻き散らす 千里の風、双岩 屹立す驚濤の中。一岩較大にして一岩小なり、是れ雄龍と雌龍ならずや。群客 先を争いて爽塏に倚り、須臾にして紅日東海より上ほれり。雙龍珠を争いて勢い飛騰し、波浪 碎けて黄金の彩を発す。僮夫 跪拜すれば書生嗤うも、此の中の是非都て知らず。詩思 端無くも天より落つ、我と鷗侶俱に機を忘る。)

前半は夫婦岩に挟まれた日の出を「双竜奪珠」に喩え、波浪に反射し、キラキラ輝くさまを描いている。「双竜奪珠」は中国のめでたいシンボルで、絵画、建築、民芸によく使われるモチーフであり、衣洲の中国滞在経験を生かした描写といえよう。

興味深いことに、後半は「御日の神」を参拝する粗野な田舎者（「僮夫」）とその様子を嗤う学生（「書生」）を呈示し、「此の中の道理我知らず。端無くも詩思が天から降り来り、我は鷗侶と共に機心を忘れる」と締めくくった。国を離れて世の中の出来事や世論の流れを知らない自分は世の中と争わず、世事にとらわれずに詩作に没頭したい、という。衣洲は「鷗鷺忘機」の典故を使い、「御日の神」の参拝の是非に関与せず、世俗と距離を置こうとする詩人の心境を吐露している。「鷗鷺忘機」は『列子』の「海上狎鷗」⁴⁷の話を取り起させるだろう。海鳥たちと仲良くしてきた漁師が一変してその仲の良さを利用して海鳥を捕まえようとしたところ、海鳥たちは彼の心変わりを見透かすかのように、遠くに去って、もう二度と彼の周りには近づかなかった。名利に淡泊な態度を比喩する名句である。

一方、衣洲が描いている風景は、中国の古琴曲「鷗鷺忘機」のイメージと高度的に一致していることも注目されたい。『五知齋琴譜』（清・周魯編、1721年刊行）における「鷗鷺忘機」のイメージは、「海日朝暉、滄江夕照、群飛衆和、翱翔自得」⁴⁸で、海に朝日が輝き、滄江に夕日が照るなかで群れ飛ぶ鳥たちと和し自在に生きる様子である。衣洲は鷗鷺の説話を使って詩人の淡泊で静かな態度を示しながら、「海に朝日が輝く」という視覚的な場面を同時に連想させている。史料の制限によって『五知齋琴譜』と初山衣洲との関わりはこれ以上考察できないが、「鷗鷺忘機」の重層的な意味合いを活用した衣洲は、頼山陽の詩作を意識している一方、視覚的畫面を目の前

神拝所の事」の項に頼山陽の詩が挙げられている。出典：<http://doutaku.saloon.jp/kodainonazo/siori5.html> (2021/1/07閲覧)

46 「雙鑑浦 觀日出歌 七月念五日遊浪華乘火車抵山田薄暮頭二見浦旅社一日早起觀日出極爲壯觀因做此歌」、『初山衣洲遺書』[49] 婦展詩草』（大阪府立中之島図書館収蔵）。

47 『列子集釈』、卷二、「黄帝篇」67。

48 『五知齋琴譜』、卷2、「鷗鷺忘機」項目、石四。

の景色に読み替え、神道参拝——のちに国家色濃厚なものとなったが——の価値判断に足を踏み入れず、世事と一線を画している。時局のイデオロギー判断に捉われない姿勢、価値観を入れずに目の前の風景を吟味しようとする一詩人としてのスタンスを前面に打ち出している。

5 ま と め

本稿は初山衣洲の清国滞在時の経歴及び詩文作品について初歩的な分析を試みた。従来の初山衣洲研究が台湾総督府と台湾人伝統知識人とのパイプとして児玉総督に重用されていた彼の台湾滞在時代に集中しているのに対し、本稿はこれまで注目されていない彼の清国滞在時の日記と詩作の『燕雲集』および「帰展詩草」に焦点を合わせて、日本帝国の版図拡大に伴って越境し続けた一詩人初山衣洲の姿を浮き彫りにしている。彼の清国滞在中の詩文を見ると、現実の不遇と詩人の自負との衝突に置かれた彼は、作詩の行為とその評価を常に強く意識している。それと相まって、詩人としての自意識が文字表現に溢れて、場合によって必要以上盛り込まれてもいることが明らかになった。また、衣洲は「鷗鷺忘機」の典故を使い、「御日の神」の参拝の是非に関与せず、世俗と距離を置こうとする詩人の心境を吐露して、価値観を入れずに目の前の風景を吟味しようとする一詩人としてのスタンスを強調している。

親友の西村天囚が衣洲の生涯を振り返って次のように評している。文章を命とする衣洲は好古のため不遇になったが、不遇だからこそ文章に集中し、後世に不朽の作品を残すことができた、と⁴⁹。衣洲の清国滞在期の作品を見ると、天囚の言う「文章」とは、抒情性の強い詩文創作を意味するだろう。一方、国家膨張主義による海外進出の中、衣洲は抒情的なものにもっぱら託し、詩人としての自意識を強調し、時に過剰なほど自己代弁する姿勢は興味深い。例えば、『燕雲集』の「題水壺軒壁」には、詩文唱和を時代遅れと見なす周りの眼差しに対して、衣洲は次のように反論している。英雄人物の事跡や典故を多く使って詩を綴るのは、単に感慨激昂の言葉を好むのではない、それに合致する心境と出来事が実在しているので、決して無病呻吟ではない、と⁵⁰。

最後、今後の研究展望を提示して筆を擱きたい。衣洲の交友関係から分かるように、当時職場の関係者には大陸浪人やアジア主義の論者が多かったが、衣洲本人はアジア主義者ではなく、アジア主義支持者であることさえ言い難い。例えば、保定時代に家族ぐるみの付き合いで衣洲と親交を続けた寺西秀武が陸軍出身でシナ通として有名だった⁵¹。寺西は20年代から中国の時局や日

49 『碩園先生文集』、卷三、22葉。原文：「季才以文章為命。……季才好古是以不遇、唯其不遇故得發憤肆力於文章、窮年屹屹不息……而其所作文章益工庶乎、足以傳不朽。」

50 「題水壺軒壁」、『燕雲集』、8葉。

51 寺西秀武の略歴について、『統対支回顧録 下』（原書房、1973年）の「列伝 寺西秀武」と杉村邦彦「楊守敬「与寺西秀武書」の積文と寺西秀武の略伝」（『書学論纂』、知泉書館、2018年、477-478頁）を参考にして次の通りまとめる。寺西秀武は石川県の人。『統対支回顧録 下』によると、明治3年12月生まれ（杉村邦彦の説は1869年生まれ）という。家は代々旧金沢藩の八家老の一で、禄7千石を領した。明治維新後、家運が衰え、父が早世し、母信子の手で育てられた。明治10年上京し、本郷本富士小学校、陸軍幼年学校を経て、明治24年に陸軍歩兵少尉に任じ、歩兵第二十一聯隊に補せられた。日清戦争時に京城、成歓、平壤から満洲各地へ転戦した。31年に歩兵大尉に進み、同

本政府の対中政策に対して幾度も政論を日本で発表し、日中貿易の死活問題や中国通である大陸浪人の重要性を政府側に促す姿勢に終始している⁵²。陸軍を離脱した後、北京で日本人を対象とする中国語学校である恢弘塾の塾長を担い、日本の官公庁だけでなく、三井物産など中国に進出した大企業の社員を依託生として受け入れていた⁵³。一方、寺西との交友関係が親密だったものの、衣洲の日記や著作、遺稿集を読んでいる限り、衣洲には黒龍会関係者に共通する「志士」的な言説は一切見られておらず、むしろ政治イデオロギーと一線を画し、文学者としての顔が際立っているのが興味深い。その特徴は遺稿集の「氷壺軒筆記」で強く見受けられる。「氷壺軒筆記」は1910年から保定の日本人会機関誌である『保定倶楽誌』に連載された風俗誌的なコラムで、保定周辺や中国北方の独特な風土人情や歴史典故を主題として漢文で綴られたものである。中には清朝皇室の退廃を批判する内容がある一方⁵⁴、その内容はあくまでも事実報道のレベルにとどまっており、同時代黒龍会の浪人志士のようにすぐさま大陸経営の積極的な対策建言や抱負心と結びついてはいない⁵⁵。衣洲の事例は清末中国で活躍している日本人団体内部の多様性と「個」の存在を示唆しているが、衣洲と黒龍会関係者との思想的な連動／交差／断絶について研究進捗の関係で今後の研究に譲りたい。

※本稿は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）若手研究（B）（課題番号26870069、平成26～28年度）と若手研究（B）（課題番号17K13341、平成29～31年度）による成果の一部である。

年12月陸軍大学に入学した。在学中、義和団事変が起きると出征して軍功を立て、翌年陸軍大学を卒業した。明治36年6月、清国直隸総督袁世凱の招きに応じて軍事教育のため一家を連れて保定府に赴任し、明治39年に保定に陸軍行營軍官学校を開設し、その教育に当たった。明治42年5月に湖広陸軍の招聘を受けて武昌に赴き、その顧問になった。辛亥革命勃発際に黎元洪を助けて革命軍に参加し、その後、黎元洪、段祺瑞の軍事顧問として中国で活躍していた。大正5年、顧問の職を辞して、翌年6月住友合資会社の嘱託となったが、中国と日本に往来し、民国期の軍閥割拠の中に政治と軍事の場で活躍を続けていた。

52 寺西秀武『最近の支那政情と対支方策私見』（霞山会館、1937年）を参照。

53 寺西と恢弘塾との関係について、岸陽子「人と学問 中国文学を志して：私の原点」（『中国：社会と文化』29号、中国社会文化学会、2014年）及び北京恢弘塾塾友会編『寺西秀武と北京恢弘塾』（私家版、北京恢弘塾塾友会、2005年）を参照。

54 「端郡王」、『[初山衣洲遺書] [25] 氷壺軒筆記』（大阪府立中之島図書館収蔵）。

55 衣洲の淡々とする筆触は同時代黒龍会機関紙『東亜月報』（内田良平文書研究会編『黒龍会関係資料集』、柏書房、1992年）の積極的な大陸進出論と対照的である。

●参考資料：初山衣洲の海外活動の概要（大阪府立中之島図書館収蔵の初山遺稿に基づき、筆者作成）

	活動概要	日記（●）、著作（◎）、翻訳（○）
1898	11月19日 東京から渡台、『台湾日日新報』漢文部主任に着任。	●『常總日記』：1897年3月18日、1898年11月19日－1899年6月23日（4月18日至4月26日欠）
1899	1月18日、饗老典編集を担当。 4月、児玉総督と彰化に饗老典を参加。その内容は台湾日日新報に「隨轅記程」として掲載。 7月18～28日、一時帰国。 8月、児玉総督の別荘南菜園に移転。 10月21日至11月17日、児玉と台湾に饗老典を参加。その内容は台湾日日新報に「航南日記」として掲載。	●『懐歌堂日記』：1899年8月15日－1899年12月29日（11月18日至11月27日欠）
1900	3月、揚文会に出席。	●『澄心廬日記』：1900年1月1日－1904年4月10日（1903年5月17日－7月6日欠） ◎詩集『南菜園唱和集』（出版地不明、1900） ◎詩集『穆如吟社集』（台湾日日新報社）
1901	9月24日～10月5日、鄭拱辰事件に巻き込まれる。	
1902	1月、古亭荘の内天人禿村事件に悩む。 8月、赤痢に罹り、のちに持病となる。 1902～1903年間、『台湾風俗詩』執筆を開始。 11月17日～翌年1月14日、一時帰国。九州大分で休養。	●『游豊日記』：1902年11月17日－1903年1月14日
1903	1月14日、帰台。 4月13日、台湾日日新報を辞任。 5月17日～7月6日日本に一時帰国。 7月16日、総督府学務課に就職。	◎詩集『台湾風俗詩』（未刊行）
1904	4月、総督府学務課離台を辞任。離台。 4月23日、和歌山に客居。 7月1日、総督の満州出征に随行を要望。 10月6日、小田原に移転。 11月、東斌学堂の設置に携わる。	●『澄心廬日記』：（1904年4月10日から続き）1904年4月23日－12月30日
1905	2月13日、東斌学堂に移転。 5月、『如雲綿』事業に携わる。 7月6日、満州行を児玉に申し出る。 8月26日、林古松と北京渡航を談合。	●『落木莽日記』：1905年1月1日－9月20日
1906	1月、前年から天津にいる。『北洋日報』記者を担当。 4月7日、保定に移転。陸軍軍官学堂翻訳官を担当。『燕雲集』を執筆。 8月～9月、平山武清の人事をあっせん。 10月25日～11月13日、持病再発。	●『北游日記』：1906年1月1日－11月25日 ○翻訳『夜戰通法』（伍士修編、雷啓中修、第五鎮工程營出版、1906）、『支隊戰術講義録（二卷）』（壽永康編、王景菴修、第五鎮工程營出版、1906）
1907	6月26日、持病再発。	●『冰壺軒日記』：1907年1月1日－12月31日 ○翻訳『混成協戰術（二卷）』（壽永康編、雷啓中修、第五鎮工程營出版、1907）、『兵站勤務附圖』（出版地不明、1907）
1908		○翻訳『戰略學』（應雄圖編、出版地不明、1908）
1909	7月12日～8月16日以降、一時帰国。『歸展詩草』執筆。	◎詩集『燕雲集』（雷啓中、1909） ◎詩集『歸展詩草』（未刊行）
1910	10月19日、保定学堂を辞任、帰国。	○翻訳『軍官学堂教科書軍制學』（應雄圖、壽永康共編、雷啓元修、出版地不明、1910）、『馬隊戰術教戰書』（宮英編、出版地不明、1910） ※その他（出版年不明）：『改編軍械精蘊』（簡直義編、雷啓中修）、『改編射擊精理』（簡直義編、雷啓中修）、『氣球學教程』（杜泰辰編）、『應用高等帥兵術』（壽永康編）
1911		◎衣洲口授、近藤吉太郎筆記『支那商業尺牘講習録』（全四巻。大阪：崇文會。1911）
1912		●『苟然屋日記』：1912年8月1月－12月17日
1913		◎『支那骨董叢説』（崇文會、1913）
1914	3月7日～5月28日、再び来台。	◎『書畫落款式』（崇文會、1914）
1919	死去	◎『支那陶器詳説』（崇文會、1919）

「此身類飛蓬，此心淡如水」
——關於初山衣洲的清國滞在體驗

許 時 嘉

1898年初山衣洲(1855-1919)以台灣日日新報漢文部主編身份來台，深受台灣總督兒玉源太郎重用，活躍於台灣總督府與台灣傳統知識分子之間，後來不受後藤新平賞識，於1904年4月黯然離台。過去學界對衣洲的研究，多集中其台灣活動期間，離台後的研究卻付之闕如。有鑒於此，本文分析過去甚少被學界注意之衣洲旅居清國期間的日記與詩文手稿，企圖刻劃在日本帝國版圖擴張的大時代背景下、為了尋求生計而隨之向外越境移動的漢詩人身影。

從本文對衣洲保定時期的詩文分析可發現，外在現實的不遇與詩人內在的自負，讓他格外意識到「作詩」這項行為與隨之而來的外在評價，使得衣洲在字裡行間，處處（有時甚至是過度地）流露出作為詩人的自我認識。另一方面，詩人抒情描物的執著，也反映在他的詩作思想上。例如「雙鑑浦 觀日出歌」對眼前日出之景的詠嘆，原本容易直接連結至對天皇象徵的崇敬，但他透過「鷗鷺忘機」的典故，跳脫世人對御日之神認知的是非判斷，透露出刻意與世俗保持距離的詩人心境，強調詩人不受既有的價值觀控制、專注於體會眼前一景一物的立場。再者，衣洲於公於私與活躍於中國的亞洲主義者（如寺西秀武）往來密切，但其政治理念卻不見普遍存在於當時亞洲主義者之間的一統中國或整個東亞之雄心壯志。衣洲這種人物的存在，有助我們進一步深思日本國權主義氛圍下日人活動的個別性與多樣性。